

## イブニングセミナー SP2 中津蘭学のパイオニア精神と私の歩み

川島真人

社会医療法人玄真堂 理事長

私は1944年、大分県中津市船場町に生まれた。実家は明治を代表する先覚者福澤諭吉の家から200メートルにも満たない近くであったことから幼い頃から福澤諭吉の家を掃除し、福澤諭吉の伝記(福翁自伝)を読みながら育った。母校・北部小学校の担任であった松山均先生から『福翁自伝』を読んだ感想文を書く様に指導されたことから、文章を書くことを習慣付けられ図書委員にされ沢山の偉人の伝記を読む度に感想文を書かされた。そのことから私は中津藩が生んだ数々の偉人、特に蘭学者について興味を持つようになった。1969年から1972年にかけて東京の虎の門病院で整形外科医として研修中に、クラスメイトの眞野喜洋・後の東京医科歯科大学教授、日本高気圧潜水医学会元代表理事がヘリウムガスを使った深海潜水実験中に減圧症にかり、その治療が終わった後、めまいのため歩行困難となったことから、虎の門病院の神経耳鼻科の小松崎篤先生(後の東京医科歯科大教授)に診てもらいたいということから整形外科のベッドを空けて受け入れた。あの元気な眞野先生が歩行不能に陥っている現実に直面し減圧症の恐ろしさを知った。幸いにも小松崎先生と私の大学の同級生であった脳神経外科萩原隆二先生の治療により回復していった。そのことがきっかけになり、1972年から1981年にかけて北九州市にある九州労災病院に勤務することとなった。眞野先生や東京医科歯科大学の青池勇雄整形外科教授などからの情報がすでにあったのか当時の天見民和病院長・九州大学名誉教授は、私を昼間は整形外科医として勤務させ、その他の時間は高気圧医療研究部の兼務で「減圧症と骨壊死」の研究に取り組んでもらいたいと要望された。私は減圧症も眞野先生を診ただけで殆ど知らず、またこの様な病気があること事態も知らなかった。私は天見先生が命ずるままに9年間にわたって減圧症の治療や有明海大浦漁協における潜水士の骨壊死検診、その病態解明のための動物実験を行ってきた。それを行う傍ら何か自分を支えるものは無いかという思いから、福澤諭吉を生んだ中津藩蘭学のパイオニア精神を受け継ぐ必要があると感じるようになった。

この中津藩は、医者で哲学者としても有名な三浦梅園が、三度も学びに来た所である。その時に中津藩の御典医であった根来東麟を訪ねたところ、東麟の父親・東淑がつくった日本最初の人骨解剖図「人身連骨眞形図」があり、梅園は驚きこれを模写し解説文を写し取り、後に「造物余譚」として後世に伝えた。この「人身連骨眞形図」は1732年に描かれ1741年に書に取められ、中津藩が如何に早い時期から解剖に取り組んでいたかが判明した。中津藩3代目城主奥平昌高は母親が脛骨を骨折し、なかなか治らなかつたところ、たまたま江戸に来ていた長崎の蘭方医・吉雄耕牛が見事に治療したことから蘭学に興味を持ち、藩医・前野良沢を1769年11月3日長崎に派遣した。良沢は長崎で吉雄耕牛をはじめ様々な蘭学者から蘭語を学び、「ターヘル・アナトミア」という解剖学の書を手にし、1771年3月4日に江戸千住小塚原での解剖に杉田玄白らと参加し、その翌日から中津藩江戸中屋敷(現在の聖路加病院)で「ターヘル・アナトミア」の翻訳を開始した。辞書の無い時代であったために翻訳は困難を極め、3年半もかかってようやく杉田玄白が「解体新書」として出版し、良沢は日本最初の蘭学のパイオニア(鼻祖)となった。その時、良沢を支えた言葉は、叔父で淀藩医宮田全沢の養育訓である「世の人々が打ち捨てたことに取り組み世の為にそのことが残るようにすべし、世の人々がやっていることのみやれば一生涯むなく人の後を歩かなければならない、男児たる者は人のせぬようなことを創始して世の先導者たり」という養育訓であった。この言葉は私の生涯を支える言葉ともなった。その後、蘭学は日本国中に広がっていったが辞書が無いため医師を中心とした蘭学者達は解

説に困難をきたしていた。その中で中津藩5代目城主奥平昌高は、辞書の重要性に着目し、1810年には日本で最初の和蘭辞書「蘭語訳撰」、1822年には日本で3番目の和蘭辞書「中津バスタード辞書」(中津辞書)を出版した。中津辞書は全国に普及し、私が後にライデン大学ヴォイケルス教授の要請で講演した時に、オランダ人が長崎に行くためにホフマン教授が、この二つの辞書を使って日本語教育がされていたことを知った。この様に中津藩は、藩主が率先してオランダ語を学び、なかでも5代目藩主奥平昌高はシーボルトの参府日記を見ると、江戸滞在中のシーボルトを毎晩のように訪ね26回も名前が登場している。この様なことから地元中津に於いても、1640年から13代続いている「村上医家史料館」があり、1758年以来8代続いている「大江医家史料館」がある。1849年日本で最も早い時期、辛島正庵が種痘に使った医学館は、1872年中津医学校となり校長に大江雲澤を附属病院院長に藤野玄洋が就任して大分県で最初の医学校が創設された。その医学校は1880年中津医学校と成り、その後現在の大分県立病院となって今日も残っている。この様に中津藩のパイオニア達の精神を支えたものは、大江雲澤が残した「医は不仁の術、務めて仁をなさんと欲す」という学問訓である。この学問訓は華岡青洲塾(合水堂)に学んだ雲澤は、医術というものには極めてリスクの高いもので、それを学ぶには論文を読み、「先人に学び、患者の声に耳を傾け、懸命な努力のもとに行わないと仁術とは成らない」という意味であり、この言葉が中津医学校の医師達の学問訓として伝えられることとなった。明治に入り1875年、福澤諭吉の親族にあたる小幡英之助が日本で最初の歯科医免許を取得し東京で開業し歯科医学の開業が始まった。福澤諭吉と共に大坂の適塾の緒方洪庵に学んだ田代基徳は、1868年には「切断要法」を出版し、大学東校(東大医学部の前身)大助教、後に教授、陸軍軍医学校長として活躍し、長女春子の婿養子として迎えた田部井又平は義徳と改名し、東京帝国大学を出てドイツに留学し、1906年には東京帝国大学初代整形外科教授となり「日本整形外科の父」と呼ばれる活躍をする。田原淳は1872年、中津の医師田原春塘の養子と成り東京大学に学び、その後ドイツのマールブルグ大学に留学しアショフ教授のもとで病理学を学び、心臓の刺激伝導系と云うノーベル賞に値する業績をあげ、今日のペースメーカーや心電図の基礎を築いた。この様なパイオニア精神を学ぶ中で、これまで余りやられて無い分野の「高圧医学」の領域で私もやってみようということになり、1973年からほぼ毎年のように研究成果を米国で発表する様になった。特に減圧性骨壊死というのは防災疾患としてもまだ認定されていなかったため、1975年には大変な困難な中で日本潜水病の骨壊死としての職業病の労働災認定第1号に成功した。その後、日本国内のみならず台湾やオーストラリア等世界各地の減圧性骨壊死の認定をすることになって今日に至っている。やがて我々も減圧性骨壊死の研究は北野元生先生(後の鹿児島大学教授)が東京医科歯科大学から九州労災病院に赴任し、更に病理学的研究が深まるなかで、4名の潜水士の病理解剖のみならずウイスコン大学のチャーリー・レーナー博士、アレクセイ・ソバキン博士と羊250頭を使った動物実験によっても減圧性骨壊死を作ること成功し、その共同研究は20年間にも及んでいる。毎回米国の国際潜水高圧学会に参加する度に化膿性骨髄炎や脊髄疾患など極めて広範囲の疾患が高気圧酸素治療の適応とされていることを知り、多くの学会の先輩達と共に適応症の拡大を図り又、今日の米国と変わらない適応症を厚生省に認めてもらうことが出来た。これも柳下和慶教授と共に何とか、国際水準から極めて低い診療報酬2千円から3万円に引き上げる困難な交渉に臨み、合志清隆先生を始め多くの先生方による高圧診療報酬の国際比較等の資料を呈示することによって、遂に成功し、多くの戦列を離れていた大学や労災病院、病院、診療所等が高気圧酸素治療に復帰してきたことを喜ばしく思う。蘭学に学ぶことは、「道は無限にあり成功するまで続けること、熱意は磁石であり、先見者を養い、人材を育成すること。」それが中津藩蘭学のパイオニア精神であり、また私が高圧医学に於いて様々な人々がしてこなかったことをすることが出来る支えとなったことをお話しする。